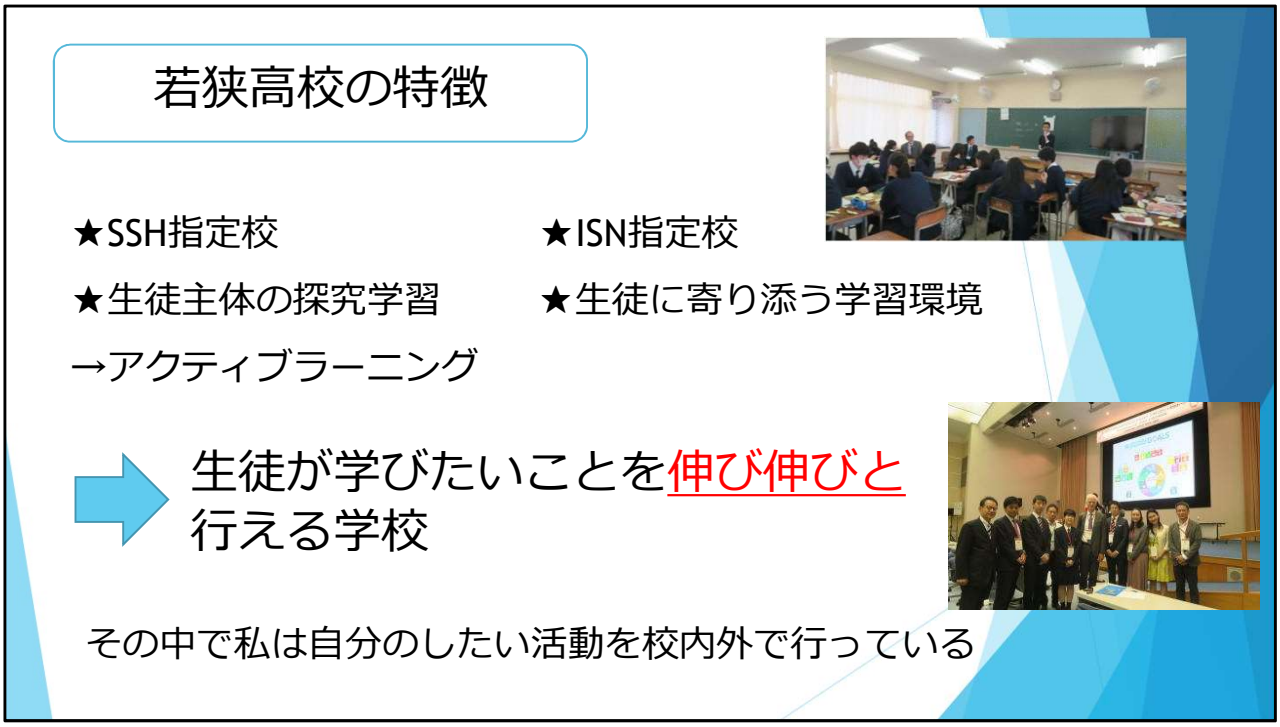
私の学び

若狭高校　国際探究科　竹内陽渚

（2020年3月11日(水) 15時～17時30分にオンラインで実施）

はい、お願いします。若狭高校、国際探究科の竹内です。よろしくお願いします。今回、私はこのシンポジウムの中で、生徒の立場として話す中でまず、私が通っている若狭高校の話をしたのちに、若狭高校内の特徴などを述べて、そのあとに私が参加したIWGでの学びや今後の学びについて話したいと思っています。



私が通っている若狭高校の特徴は、大きく分けて4つあります。まず、SSHに指定されていて、さらにISNの指定校でもあり、生徒主体の探究学習というものにすごくフォーカスかつ力を入れている学校です。最近よく聞くアクティブラーニング等も積極的に取り入れています。また、生徒に寄り添う学習環境が整っている学校だと私は感じています。その中で、生徒がどういうふうに学んでいくかというのが大事だと思うんですけど、生徒が、自分の学びたいことを伸び伸びと行えている学校だなという印象が私の中では一番大きくあります。その中で、私を含め、多くの人が、自分のしたい活動を校内外で行っています。

探究学習

1．何のために探究学習をしているのか

2．どんな力が必要で、どんな力を得られるのか

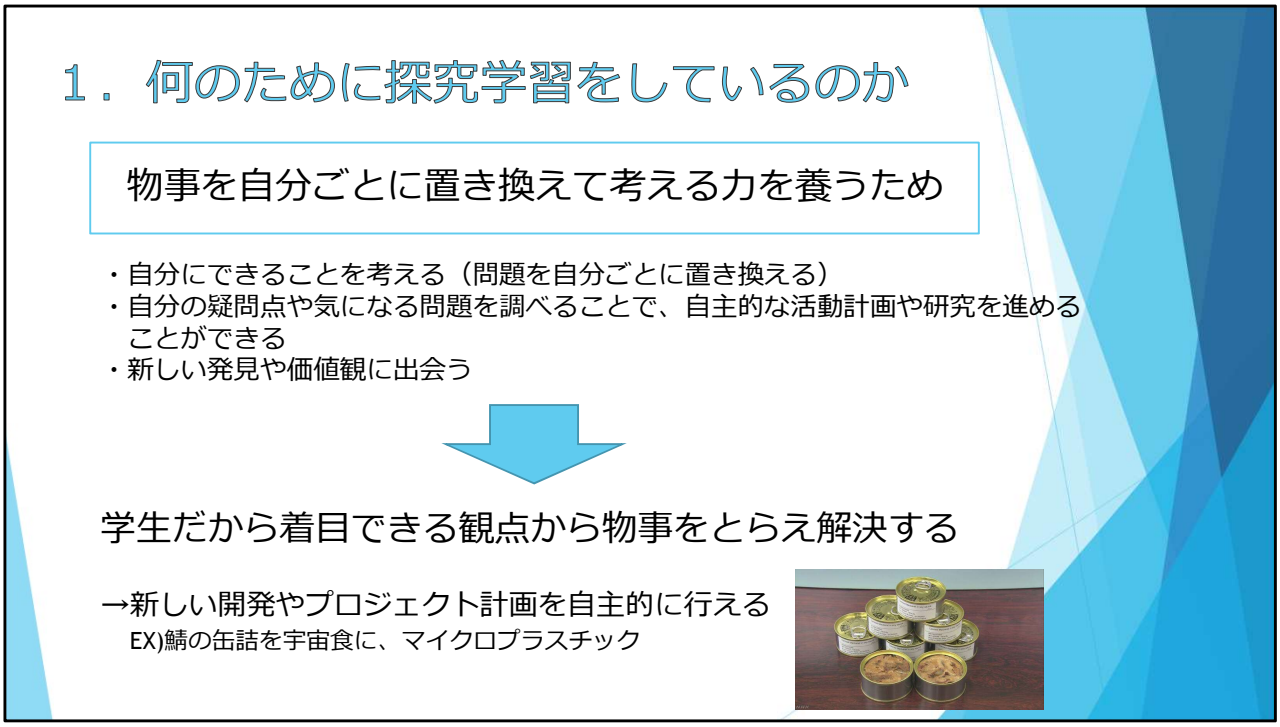
私の活動：水仙を使った復興支援プロジェクト
～おおい町(自分の住む町)の知名度upと被災者の笑顔のために～

現状分析、先行研究、資料(データ)収集、発表原稿づくり等

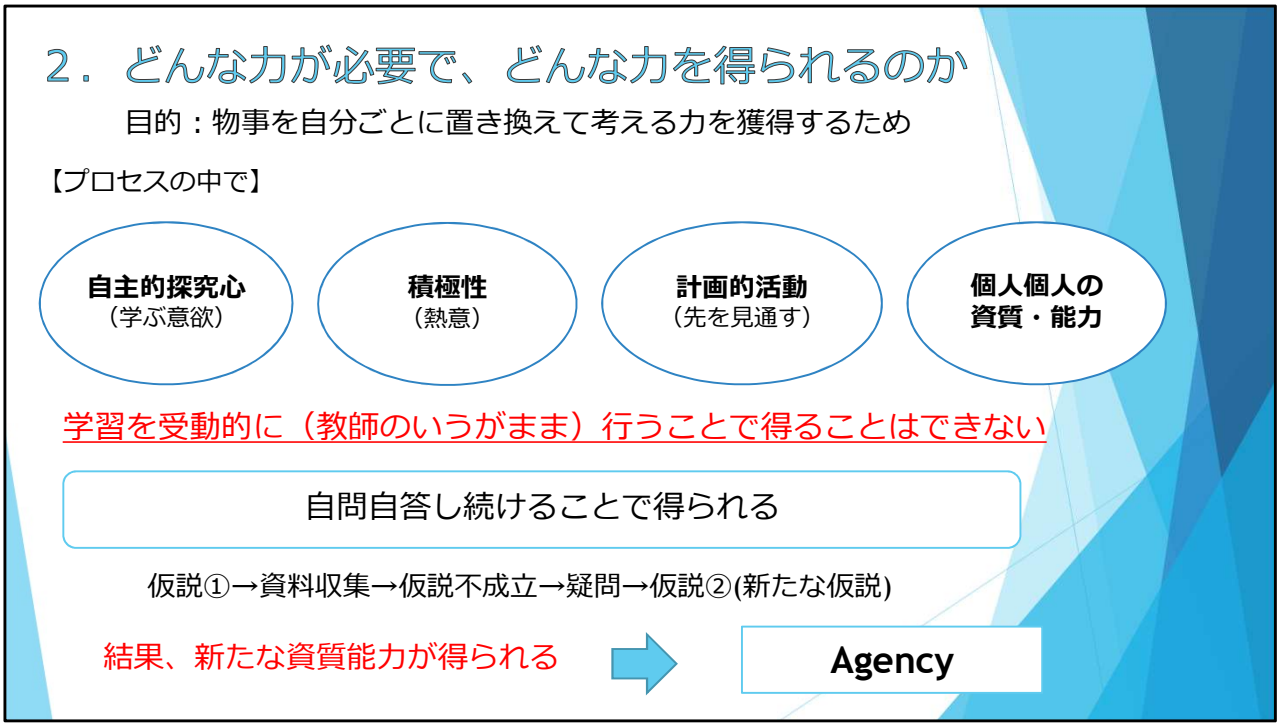
→これらのことを週1の授業や放課後を通して自主的に行う

（カリキュラムに組み込まれている学習）

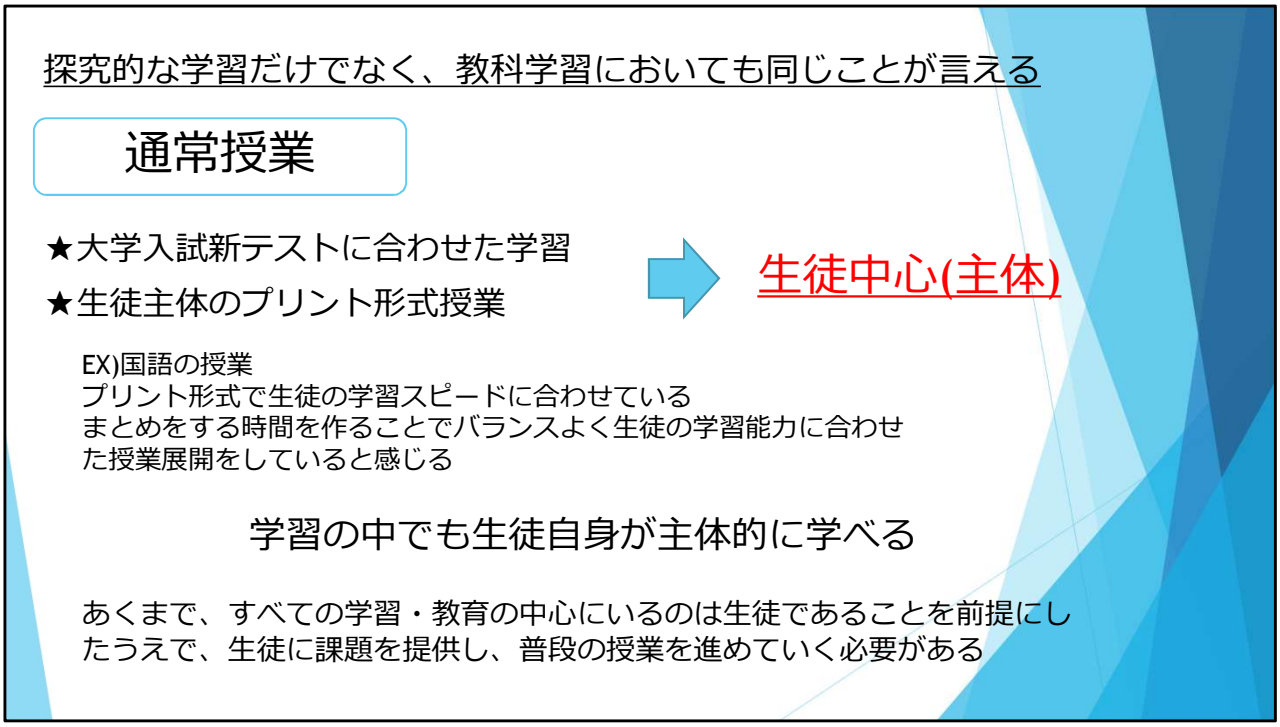
今回最初にフォーカスするのが、探究学習についてです。まず大きく分けて２つのポイントで話したいと思っています。１つ目は、何のために探究学習を私たち生徒はしているのか、２つ目は、どんな力が必要で、どんな力を得られることができるのか、です。実際私が探求学習の中で行っている活動は水仙という花を使った復興支援プロジェクトです。これをするきっかけになったのは、現状分析の中で、自分の住んでいる町にある課題点を見つけ、それに加えて、問題と重なっている部分が復興支援にあるということを感じたからです。若狭高校の探究活動では、現状分析や先行研究、また、資料の収集など、課題を見つけるまでの事前の研究がすごく充実していて、ここをしっかり充実させることが私は良い探究学習を進めることにつながっているんだなというふうに考えています。また、さらに発表原稿など、高校生という立場から見ても、パワーポイントを使ったり、あんまり経験できないことを主体的に、生徒が自らやらなければいけないという責任をもってやっている部分も大きいなと感じています。また、これらの活動は週1時間の授業、または放課後を通して自主的に行っているので、生徒自身、自主的に行うっていう部分がすごく大きくて、私もそうなんですけど、嫌々やらされているからやるというのではなくて、自分がいまやらなければならないことを自分で考えてやるというが大きなポイントになっているのだと思います。



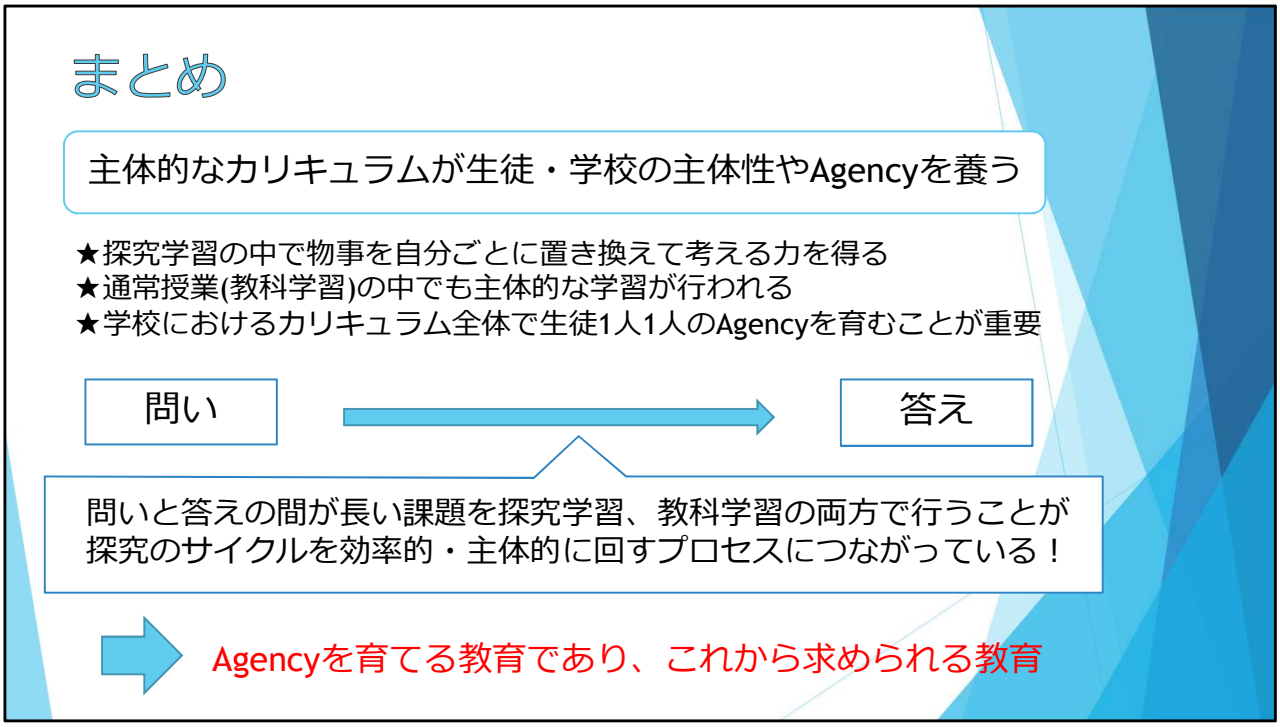
何のために探究学習をしているのかというのが、大きなポイントになっていると思うんですけど、これを私は「物事を自分ごとに置き換えて考える力を養うため」だというふうに思っています。自分にできることを考える。高校生の立場で考えられることって少ないって思う方もおられると思うんですけれども、問題を自分ごとに置き換えるっていうその部分がとても大事で、自分が持った疑問点や気になる問題を調べる中で、本当は社会に関する大きな問題だけれども、それを自分の地域や自分の身の回りの生活に落とし込んで、そして置き換えて研究を自分なりに進めるという部分につながっていくと思います。この中で、新しい発見や価値観に出会う、そしてそれが自分を成長させてくれる大きなポイントにつながっています。探究学習の中で課題をまず見つけますが、この中で大事にしているポイントは、「学生だから着目できる観点から物事をとらえて解決する」というものです。実際、新しい開発やプロジェクト計画を自主的に行えていて、例を出せば、「鯖の缶詰を宇宙食に」というのが大きくメディアでも取り上げるほど、若狭高校では有名になりました。これも若狭高校生が自分たちの地元にある鯖の缶詰をどうピーアールのするのか考える中で、「宇宙食に」というあまりつなげられないそのポイントに重点を置いて進めたことによって、このように結果にも繋がりました。またマイクロプラスチックについても学科問わず、多くの人が関わって、実際に今もいろいろな話し合いや研究を進めている状況にあって、自主的に行えるっていう部分はすごく大きいなと感じています。



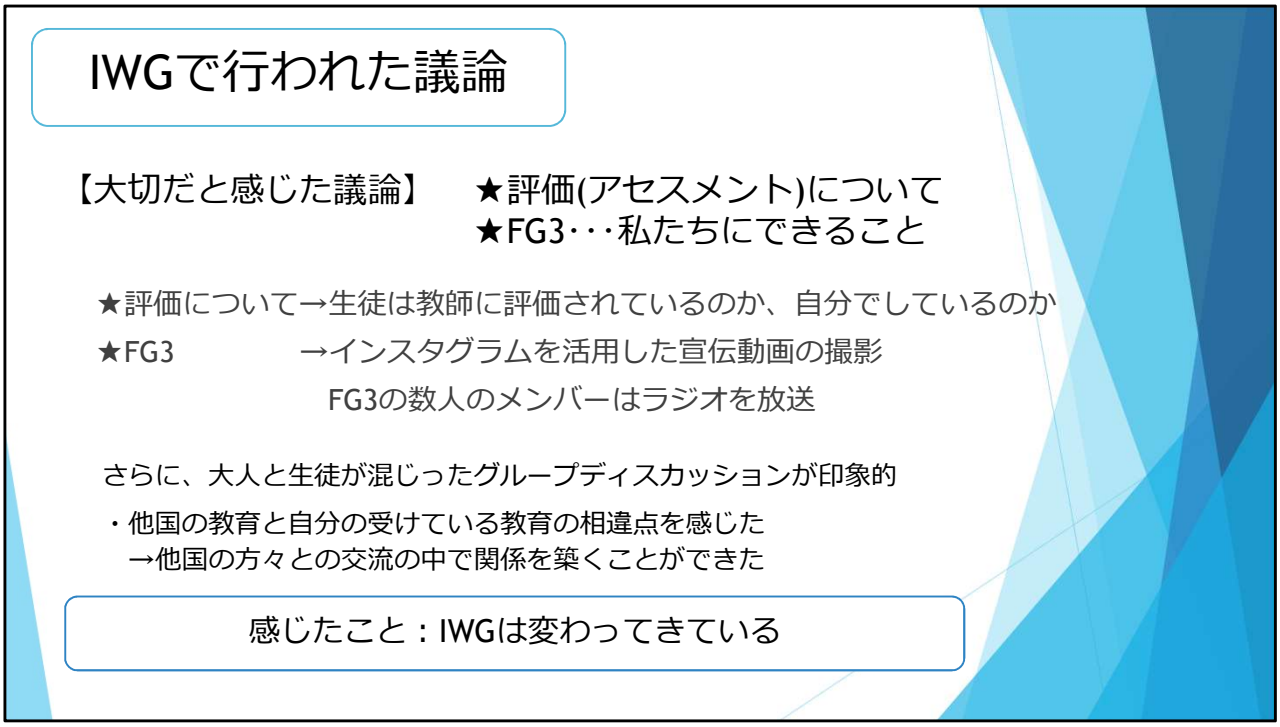
２つ目、「どんな力が必要で、どんな力を得られるのか」という部分についてなんですけれども、まず大きな目的として最初においておくのは、「物事を自分ごとに置き換えて考える力」を獲得するため。そして、これを身につけるためのプロセスの中で、「自主的探究心」、学ぶ意欲であったり、「積極性」、また、「計画的活動」、先を見通して計画を立てるなど、そういうような得られる力が自分の中で身に付いてくるのではないかなと思います。さらに、その力を得るためには、学習を受動的に、教師に言われるがまま行うことで得ることはできないと思います。自問自答し続けることで、実際、自分が前進していっていることを実感することができるのも事実です。そのプロセスの中では、仮定を見つけて、さらに資料を収集し、仮説が不成立だった場合は、なぜ不成立なのかという疑問を持ち、またさらに仮説を作るという、このサイクルをずっと続けることが自問自答につながっていて、その中で自分の研究をより前進させていけるのだと思います。結果、新たな資質・能力が得られることにつながり、これがエージェンシーなんじゃないかなというふうに私は思っています。



また、この探究的な学習だけではなく、教科学習においても同じことが言えると思います。通常授業の中では、私の学年で言いますと、大学入試が変わることもあり、その新テストに合わせた学習を展開していただけたり、また、生徒主体のプリント形式の授業があるんですけれども、生徒主体ということを念頭に置いたうえで、授業のカリキュラムも展開させている部分が大きいなというふうに思っています。通常学習の中で、私が受けている国語の授業では、プリント形式をしていて、生徒の学習スピードに合わせた授業展開になっています。これは、私の中では、生徒が主体的に学べる環境づくりになっているなと感じていて、こういうふうに、教師から提供された授業展開が生徒主体につながっているという部分が、学習の中でも生徒自身が主体的に学べていることにつながっているんじゃないかなというふうに思っています。これはあくまで、全ての学習、教育の中心というのは私たち生徒であることを前提にし、それを教師、生徒ともに理解したうえで、生徒に課題を提供して、普段の授業を進めていく必要があるのだと思います。



まとめに移るんですけれども、主体的なカリキュラムが生徒・学校の主体性やエージェンシーを養うというのが大きなポイントで、探究学習の中で物事を自分ごとに置き換えて考える力を得ることで、探究学習だけでなく、通常授業の中でも主体的な学習が行われ、学校におけるカリキュラム全体で生徒一人ひとりのエージェンシーを育むことが重要になっているなというふうに思います。図でも表したように、問いから答えの距離が長い課題を探究学習のみならず、教科学習、通常授業の中でも行うことが探究のサイクルを効率的、さらに生徒主体、主体的に回すプロセスにつながっていると感じています。なので、この若狭高校で行われている問いと答えが長い課題を生徒に提供するような教育が、エージェンシーを育てる教育であり、これから、将来的に求められていく教育なのではないかなと私は考えています。



その中で、私が経験したことについて、話したいと思います。私はIWGという、先ほど鈴木さんと木村先生からもお話があった国際会議に二度参加させていただきました２回参加させていただいたんですけれども、この両方を通じて大切だなと感じた議論がありました。１つ目は評価、アセスメントについて、これは、前回行われた第10回のIWGで行われた議論です。さらにフォーカス・グループ３では、これはカナダのバンクーバーで行われた会議のときも、ソウルで行われたときもそうなんですけど、私たちにできること、生徒だからできることにフォーカスしている議論が大事だなと私は思いました。評価については、生徒は教師に評価されているのか、自分でしているのかという、答えを導き出すのが難しい問いを別の国の生徒の方と一緒に話せるっていう、その機会がすごく新鮮で、私の中では、違う国の人と話すことによって得られる新しい価値観っていうのも大きいなと思いました。さらにフォーカス・グループ３では、SNSのインスタグラムを活用した宣伝動画を実際に他の国の生徒さんと一緒に撮影したり、数人のメンバーはラジオを放送して、いま、自分たち生徒が考える教育について語るという機会もありました。また、大人と生徒が混じったグループディスカッションもあり、IWGが、変わってきているというのをすごく感じました。２回しか行ってないながらも私の中で実感したし、その変わっていっていることによって、より良い議論が展開されているのではないかなと感じました。

感じたこと・経験（２度の会議に参加して）

OECD Education 2030 9th IWG (Canada)

会議に参加する前：言語に対しての不安
自分の経験をまとめ英訳
緊張(初参加のため)

１日目終了後：IWGについて知識不足
会話に参加できない
ディスカッションへの不安

言語の壁ではなく物事の根本を見ないとよりよい議論はできない

参加して変わった心情　言語よりも背景知識が大事

・コミュニケーションをとる方法は言語だけではない→ジェスチャーや翻訳機能
・会議はなぜあるのか、私たちが参加することの意義
・私の経験と会議のテーマの関係性

二度の会議に参加して感じたことはたくさんあります。バンクーバーで行われた会議の中で、私の考え方がすごい大きく変わったことがありました。会議に参加する前は、初めて国際会議という場に参加するので、言語に対しての不安が大きかったために、自分の経験をまとめて英訳するなど、言語についてフォーカスし過ぎてしまったというのがすごく大きくて、１日目が終了してみて感じたのが、IWGがなんで行われているのかという部分についての知識不足、それにより、会議に自主的に参加できていない部分があったということです。そこで私が感じたのが、言語の壁ではなくて、物事の根本を見ないとより良い議論はできないということです。事前にIWGについて学んでいなかった自分を後悔した部分も大きかったです。参加して変わった心情は、言語よりも背景知識のほうが大事で、コミュニケーションを取る方法は言語だけではないというのは実際本当にそうで、ジェスチャーや翻訳機能も今は技術も進んでいます。会議はなぜあるのか、私たちが参加する意義を考えないと、わざわざ呼んでいただけているのに貢献できていないという現状が大きく、さらに自分が経験したことをまとめるまでは良かったのですが、自分の経験と会議のテーマをどう関連させて話すのかいう部分も大きいと感じました。初めての参加ということもあったんですけど、いろいろ不十分な点が多かったなと感じた会議でした。

感じたこと・経験（２度の会議に参加して）

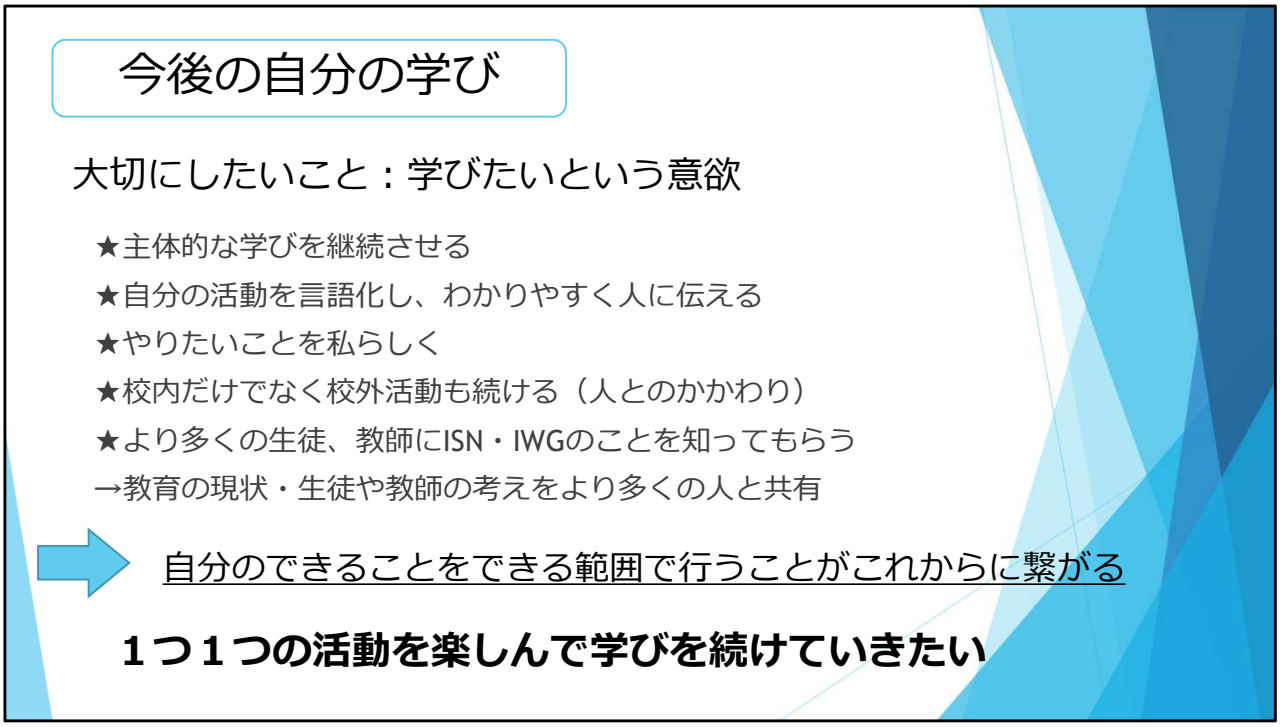
カナダでの会議で思うように話せなかったことが悔しかった
→もう一度参加して今度こそ自分の経験や他国の人の経験を共有したい！

OECD Education 2030 10th IWG (Korea)

- 生徒をより尊重→複数人のファシリテーターの導入
- 教育者・行政の方たちと分けてしまうのではなく、互いにかかわりや交流を持てる機会の提供（ブレイクタイム以外で）
- 国は違うが同じ学生だという実感
- ディスカッションの楽しさと重要性

→ ISNでやっていることと変わらない！

カナダでの会議で思うように話せなかったことがすごく悔しかったので、もう一度参加して、今度こそ自分の経験や他国の人の経験をもっと共有して、さらにIWGの中で、自分がIWGの会議に貢献したいと強く思ったので、もう一度行きたいと、応募しました。実際、ソウルの、韓国で行われた会議では、IWG自身も変わってきているんですけど、私自身も変われたなと実感しました。IWGのことをしっかりと自分の中で知識として持って行ったということもありますし、話し合われる議論が事前に教えられていたので、それについて自分が持っている経験を事前にまとめておいたり、また、日本から生徒４人行かせていただいていたんですけれども、１日目終わった夜に、みんなで集まって、次の日の会議に私たちが話さなければいけないことをお互い、日本語でまずまとめて、それを英語したらどういうふうに話せば良いのかという小さい会議みたいなものを部屋でしたりなど、自分たちが話したいことをより、どう具体的に、さらに明確に伝えることができるのかという部分を意識しながら会議に参加できたなと感じています。また、IWG自身も生徒をより尊重している雰囲気が伝わってきて、複数人のファシリテーターを導入したり、フォーカス・グループすべてを一緒にして、生徒また、教育関係者、政治に関わっている人たち、研究者も含めて、立場も年齢も違う人たちが同じグループの中で英語を使って話しているという環境は、私の中で良いなと感じました。さらに、ディスカッションを楽しいと感じることもできました。そして、このIWGでやっていることはISNでやっていることとあまり変わらない部分もあるのではないかというのが実際に二度の会議に参加して私が思ったことです。



最後に今後の自分の学びについてです。私が大切にしたいと感じているのは、「学びたいという意欲を持ち続ける」ことです。主体的な学びを継続させることも含め、自分の活動を実際に言語化して、わかりやすく人に伝えたり、自分がやりたいと感じたものを自分らしく行うこと、また、校内に留まらず、校外活動も続けて、人とのかかわりを大切にしたり、より多くの生徒・教師に私はISN、IWGのことを知ってもらいたいと考えています。教育の現状、また、教師や生徒の考えを多くの人と共有することがこれから大事になってくると思いますし、自分自身、学び続けるという部分が自分の今後の学びを発展させるのに大きくつながるんじゃないかなと思っています。またその中で、自分が無理して行うのではなく、自分のできることを自分のできる範囲で行うことがこれからの学びに繋がると大きく感じています。だから、これからは１つ１つの活動を楽しんで学びを続けていきたいと思っています。以上が私の発表です。ご清聴ありがとうございました。

（柄本）
ありがとうございました。竹内さんに若狭高校の取り組みと、探究学習を通じてエージェンシーを育成するためのカリキュラムはどうあるべきか、IWGの詳しい様子、生徒としてこれからの学びは自分としてどうすべきかということなどを色々とお話しいただきました。
それでは、本学の松尾直博教授よりお話しいただきます。東京学芸大学でOECD共同研究に2015年から関わられています。主に道徳教育、それからエージェンシーに関する研究を担当されています。何度も話題に出ております国際会議には第10回に参加されています。それでは松尾教授、どうぞよろしくお願いします。